



オールラウンダー

魔境育ちの全能冒険者は 異世界で好き勝手生きる!! 1

追い出したクセに戻ってこいだと?
そんなの知るか!!

A L P H A L I G H T

アノマロカリス

Anomalocaris



目次

第一章

「ふり〜だむ」
007

第二章

「ぼ〜いみ〜つが〜る」
159

Makyo Sodachi no All-rounder
Ha Isekai de Suki Katte Ikiru!!





ジェスター

リュカとリッカの父方の祖父で、剣聖。親しみやすい性格で、お茶目なジョークを挟むこともしばしば。

アリシア

オッドアイの貴族令嬢。魔力総量はリュカにも匹敵するほど。

カーディナル

リュカとリッカの父方の祖母で、大魔女。二人の魔法の師匠でもある。

ザッシュ

リュカをチームに引き込むが、身勝手に利用して追放した通称「自分に都合の良い男」。

リッカ

リュカの双子の妹。聖女候補の修業をしている。お金が大好きでずる賢いところも。

リュカ

本作の主人公。全属性の魔法や卓越した剣術などあらゆる能力を使いこなすが、家族には頭が上がらない……？

シドラ

ダンジョン内で発見されたタイニードラゴン。体に似合わずかなりの大食漢！

Main Characters



主な登場人物



第一章
「ふり～だむ」

Makyo Sodachi no
All-rounder Ha
Isekai de Suki Katte Ikiru!!

第零話 旅立ち

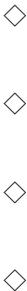
ゴルディシア大陸・カナイ村。

この村は、人口百人程度の小さな村である。

なぜ、そんなに人口が少ないのか……それはこの村の周辺に、かつて世界を征服しようと目論んでいた大魔王サズンデスの居城があり、大魔王討伐より百年近く経っている今もなお、大魔王の瘴気がこの地を汚染していて村の周囲には強力な魔物がうようよといるからだ。

だが、そこに住む数少ない住人達はその強力な魔物と渡り合える力を持っており、農業や畜産の邪魔になるからと討伐している。

この物語はそんな魔境、カナイ村から始まる――



カナイ村の酒場で僕、リュカは、サイラス、キース、アレックスの三人と机を囲んで

いる。

僕ら四人は成人である十五歳を迎えたばかり。成人祝いに酒場で、人生初めての酒を飲むもと集まったわけだ。

「俺達も今日から成人、大人達の仲間入りだ!」

グラスを掲げながらそう口にしたのはサイラス。

その言葉に頷いて、アレックスとキースも口を開く。

「そう……今日から酒が飲める!」

「そして、明日にはリュカが村から旅立つ! さあ、乾杯しようぜ!」

そんな三人の言葉を受け、僕は胸がいっぱいになりながらもグラスを掲げる。

「皆……ありがとう!」

四人はグラスを合わせた。

「……いついかなる時も、俺達の友情は変わらない! 遠く離れていても心は常に一緒だ!」

これは、村から去りゆく者に贈る言葉なのである。

そして、僕らは酒を一気に飲み干したのだが……

「まったく……」

「につが……」

「うえっ……」

「おえっ……」

言葉を発した順番は、サイラス、キース、アレックス、そして僕。言葉自体は四者四様だが、共通しているのは、初めて飲んだ酒の味が生涯忘れられないと思うほどに不味いと感じられたこと。

「おかしいぞ、村の大人達はいつも美味そうに飲んでいたのに……?」

サイラスが首を傾げると、アレックスはそれに同意するように頷いた。

「今日も酒がうめえ……ってよく言っているけど、こんなのが美味しいのか?」

「成人したばかりの俺達には、まだ早いかもしれないな……?」

サイラスが不思議なものを見るような目つきでグラスを眺めながらそう言うと、キースも呟く。

「果実の味が薄くて、アルコールが強くて……酒ってこんな味なんだな」

それを横目に僕は、無理にでも酒を味わっているフリをしていた。

自分はこれから村を出るのだから、しっかりと大人にならねばならないからね。

だが、本心は三人と変わらない。

むしろ、料理を作る際に酒類は材料として使うので、味を確かめるために何度か味見していたから慣れたものだ……と思つて酒を口にしたぶん、衝撃はひとしおだったとすら言

える。

そんな苦い体験を経て、落ち着いたタイミングでサイラスが遠い目をしながら口を開く。「それにしても、リュカはこの村を出るのか……」

「寂しくなるな、俺達はいつも一緒にいたのにな……」

「魔物をとつ捕まえて解体してから売って小遣い稼ぎしたり、変異種を捕まえて喰つたり、リツカちゃんの風呂を覗いて怒られたりと……」

サイラスの言葉に続いて、キースとアレックスがそう懐古するが……僕は思わず大きな声を出してしまう。

「ちよつと待て! 最後の話は知らないぞ? リツカの風呂を覗いただって……?」

だってリツカは、僕の双子の妹だ。

「あ、馬鹿!」

サイラスとキースが、慌ててアレックスの口を塞ぐ。

どうやら、僕の知らないところで三人は悪さをしていったんだな。

だがそれを怒るほど、僕は子供ではない。

「まあ、僕も男だから気持ちはわからないでもない。僕らと同世代の女の子なんてリツカくらいしかいないからね。それに僕がどうこうせずとも、みんなは俺の母さんか祖母ちゃんにボコられたんでしょ?」

「その後に家に帰ってから親父に殴られたな」

「俺は小遣いを慰謝料代わりに全部取られた」

「あの整った体形を見れたのは眼福だったよ。アレのためなら小遣いを取られたことなんてなんてことないぜ」

サイラス、キース、アレックスがそれぞれ口にする。

……っというか待てよ、整った体形って言ったよな？

僕は単刀直入に聞いてみることにした。

「おい、それはいつの話だ？」

「リックカちゃんが旅立つ前日」

「つい半年前じゃないか!？」

僕がそう言うと、三人は後頭部をポリポリと掻いた。

……っというつら、マジで反省してないな。

リックカは母さんからの遺伝で、『聖力』という癒しの力を持っている。

その力を役立てるために、リックカは半年前にフレアニール大陸にあるサーディリアン聖王国の大神殿へと、聖女になるための修業に行ったのだ。

その旅立ちの前日に覗きに行くなんて、普通に最低ではあるが……リックカがやたら上機嫌で旅立っていったので、まあ僕があえて怒ることはあるまい。

そんなことを考えていると、サイラスが突然手を挙げて言う。

「どれもこれもこの村で出会いがないことが原因だと思う！ リュカが都会に行つて冒険者で一山当てたら、女の子を紹介してくれ！」

「紹介するのは良いけど、こんな危険な村に嫁ぎたいって子がいるかな？ 冒険者として来て、腕を磨きたいとかならともかく……」

僕がそう返すと、サイラスは少し考えた後に肩を落とした。

「やっぱりそうだよな……」

その横でアレックスが元気な声を上げる。

「冒険者の女子か……可愛ければよし！」

こいつら……好き放題言ってくれるな。

僕は冒険者になるのが目的で、遊びに行くわけではないんだぞ。

そう思っていると、『冒険者』という言葉から僕の村を出る目的を思い出してくれたらしく、キースが言う。

「それにしても、リュカは憧れの冒険者になるのか……」

その言葉に、サイラスとアレックスもうんうんと頷く。

「リュカの口癖だったもんな！」

「冒険者になって、いつかは英雄になる！ ってな」

だが、僕の本心は――

「それはもちろんそうなんだけど、早く家を出たい……いや、村を出たいっていうのもあった」

「「あー」」

僕は村での過酷な日々を思い返す。

僕は幼い頃から両親と祖父母達に育てられてきたんだけど……修業内容は悲惨とすら言えるものばかりだった。一歩間違えれば、軽く死んでいたくらいに。

いや、実際には何度か死んでいて母さんの蘇生魔法で生き返らされたからなんとかあったけなだけだ。

そんなことを思い出しつつ僕は立ち上がる。

「さてと、僕はそろそろ家に帰るよ」

「なんだ、もうかよ？」

サイラスは不満げだが、それをキースとアレックスが宥める。

「あまり無理をさせるなよ、リユカは明日早いんだろ？」

「そうぞー！ リユカ……頑張れよ！」

僕達は再び乾杯してから、酒を一気に飲み干した。

もっともその直後に、ペロを出しながら苦みに耐えることになったけれど。

酒場を出た僕は、家までの道を歩いていた。

「次に帰ってくる時には、お酒が美味いと思えるようになっていれば良いな」なんて考えながら。

そうして五分ほどかけて家に戻ると、両親と祖父母達に気付かれないように部屋に入る。気付かれたら、どんな手荒な歓迎をされるかわからないからね。

翌朝、旅立ちの日。

早く起きて支度を整えた僕は、リビングにいた家族に一人ひとり挨拶をすることにした。僕はまず、元聖女の母さんに頭を下げる。

「これまでお世話になりました！ 立派な冒険者になってみせるよ！」

すると、母さんは今にも泣きそうな顔をした。

「あありユカ！ リツカに続いてリユカまで家を出るなんて……母さん悲しい！」

「安心してよ母さん！ すぐには無理かもしれないけど、数年したら戻ってくるからさ！」

「本当!? 約束よ！ 嘘ついたらギガントモーニングスターの餌食にするからね」

「こわっ！ 息子を殺す気かよ！」

そう言いながらも僕は母さんとハグして、向かい側にいる、錬金術の権威である父さんの元に行った。

「父さんは、特にリユカのごことは心配してない。だが、くれぐれも体だけは気を付けてな！」

「父さんも元気でね」

僕は父さんとハグしてから、元剣聖である父方のおじいちゃん——とー祖父ちゃんの元に行った。

「頼まれていた鋼の剣だ。偽装を施して見すばらしい鉄の剣に見えるようになっておいた。それと、ミスリルの剣も渡しておくが……人前ではあまり使うなよ！」

「大丈夫だよ、鋼の剣だけで十分さ！ とー祖父ちゃんもありがとう！」

僕はとー祖父ちゃんとハグをしてから、大魔女と呼ばれた父方のおばあちゃん——とー祖母ちゃんの元に行った。

「良いかい、リユカ。初めっからチームに誘われることはないとは思いますが、くれぐれも魔法を使う時は注意するんだよ！ 特に収納魔法や転移魔法、浮遊魔法の類と多属性魔法の同時発動や、複合統一魔法の類は使わないようにするよ！」

「わかってるよ、魔法も極力使わないようにするよ」

「それと、念のためだが……一応このワンドも持っていきな！ 性能は良い物だが、偽装を施しているから値打ち物には見えないさね」

僕はワンドを受け取ると、とー祖母ちゃんをハグしてから、母方のおじいちゃん——

かー祖父ちゃんの元に行った。

かー祖父ちゃんはトレジャーハンターだけど、何かくれるのかな……？

「他の二人が物を渡していると、ワシまで何かを渡さないといけない流れになっているが、ワシは渡せるような物は持っていないのでこれを渡しておく。困ったら使え！」

「これは……お金？」

「本当に困ったら使えよ。まあ……お前の場合は、リツカと違って無駄遣いをするようなことはないと思うが……ともかく必要な時期が来るまでは収納魔法に入れておけ！」

収納魔法とは、生物以外の物……金品をはじめ食材や素材などを時を止めた状態で保存出来る魔法のこと。これを使えば長期保存——どころか永久保存も可能である。容量もかなりあるしね。

「ありがとう」

お札を言うと、かー祖父ちゃんにハグされた。体中の骨が悲鳴を上げるくらいの力が籠っていた。

そして高名な魔道具制作者である母方のおばあちゃん——かー祖母ちゃんの元に行った。

「私は……これだよ！ 万能ツールのまどうくん三号」

「あ、完成していたんだ？」

「針ほどの細い物から、大木のような太い物まで好きに加工出来る魔道具だよ！」

「これは嬉しい！ 大切に使うよ！」

僕はかー祖母ちゃんをハグした。

そして離れると、僕は皆に手を振って家を後にした。

村の入り口に向かって歩いてみると、幼馴染や村中の人達が別れの挨拶してくれた。

僕は皆に見送られながら、村を出た。

「よし……行くか！ 高速移動魔法「アクセラレーション」、軽量化魔法「フライトレーション」、回復補助魔法「リジエネット」！」

僕は三重魔法を掛けてから走り出した。

走り続けて、一番近くの冒険者ギルドがある街——カイナートに到着する頃には夕方になっただ。

「確か……青い屋根の大きな建物……あった！」

僕は冒険者ギルドの門を開けて、中に入った。

入ってすぐに冒険者の待合所があり、右側にはクエストボード。奥にはカウンターがあり、その横に階段があった。

僕はカウンターに歩いていき、受付のお姉さんに尋ねた。

「冒険者登録をしたのですが……」

「あ、はい！ こちらで冒険者登録が出来ますよ。その前にまず試験を受けてもらう必要があります。今からでも、日を改めて受けていただいても構いませんが、いかがいたしますか？」

「では、今からお願います！」

「では、こちらの用紙に記入をお願いします」

僕は受付のお姉さんから渡された用紙に必要な事項を記入していく。

「名前、リュカ・ハーサフェイ。年齢十五歳。ジョブ……ジョブ……」

そういえば、僕のジョブって何だろう？ 剣が使えるから剣士？ 魔法が使えるから魔

道士？ 斥候？ アイテム士？ 錬金術師？ ヒーラー？

どのジョブの役割でもまだまだ未熟ではあるが、かじってはいるから悩んでしまう。

どうすれば良いかと悩んでいたら、お姉さんが教えてくれた。

「ジョブに関しては、最初から特定のジョブを持っている人は少ないので、これから何になりたいかを書いておけば良いですよ」

「ありがとうございます！ 何になりたいか……僕は、『オールラウンダー』になりたい」と

記入した用紙をお姉さんに渡した。

「リュカ・ハーサフェイ様、年齢十五、ジョブはオールラウンダー、と。頑張ってください」

「いねー」

「ありがとうございます！」

「では、早速試験を受けていただきますので、ついてきてください！」
僕はお姉さんの後ろをついて、カウンターの脇の道を進んでいく。

抜けた先は、訓練場になっていた。

「俺が試験官のマードックだ！ よく来たな、ひよっこ！」

マードックさんは筋骨隆々で、いかにも強そうな感じ。でも、にかつとした笑顔はとても爽やかで、いい人そう。

「よろしくお願いします！」

「うむ。では早速剣術から試験を行う！ その木刀を持ってかかってこい！」

僕は木刀を手にとって、構えた。

すると、マードックさんは笑顔で言う。

「遠慮はいらねえぞ！ 本気でかかってこい！」

「本気で……ですか？」

「なんだあ〜？ ひよっこの癖に俺が怪我しないように手加減しようとしているのか？ 要らぬ心配だ。本気でかかってこい！」

「では、行きます！」

「おう、来い！」

「剣王・真空斬」

僕は横一文字の斬撃を飛ばした。

「へ？」

マードックさんは素っ頓狂な声を上げたものの、飛び跳ねて躲す。

僕の斬撃は、マードックさんの後ろの壁に大きな痕を残した。

マードックさんは、冷や汗をかいている。

僕は、もう一度構えた。

「躲されてしまいましたか……では、次は連撃で——」

「ちよちよちよ、ちよつと待てい！」

僕の言葉は、マードックさんの焦ったような声に遮られる。

「はい？ なんですか？」

僕が聞くと、マードックさんは神妙な顔で聞いてくる。

「今のは剣聖の技だろうか？ 誰に習った？」

「父方の祖父に習いましたが……」

「お前の祖父は剣聖なのか？ 名は？」

「ジェスター・ハーサフエイ」

「は、はあ!? 本当に剣聖じゃないか! どうりで——」

「では、次行きますね!」「剣王祖乃太刀・裂空破斬——」

「まてい! 合格だ! 合格でいいから、次の試験に進んでくれ!」

そして、マードックさんは僕を次の部屋へと案内してくれた。

マードックさん、青い顔をしていたけど大丈夫かな……? :

そんなことを考えながらも次の部屋に入る。

部屋の中には、的当て用の人形が五体並んでいた。

そして別の試験官が話しかけてくる。

「私はトパーズ。魔法適性の試験官です。貴方に魔法の適性があるか見ますので、貴方が使える中で最高の魔法を放ってください」

「最高の魔法……ですか?」

困ったな、どうしよう。ここは冒険者登録の試験場なわけだし、生半可な魔法ではいけないってことだよな? なるべく力を抑えろって言われているから、本気は出したくないんだけど……

僕が悩んでいると、マードックさんがトパーズさんに耳打ちをしていた。

多分さっきの試験について報告しているのだろう。

しかし、それを聞いたトパーズさんは冗談を耳にした時のように鼻で笑うと、僕に言った。

「ファイアボールでも撃てれば御の字です。やりますか? それとも出来ないんですか?」

「やりませんが……本気でやっても良いのですか?」

「お好きにどうぞ」

トパーズさんは手をひらひらさせながらそう言った。

実力を測るための試験なんだから、本気でやらないと駄目だよな?

僕は両の掌を上に向ける。

「右手から炎……左手から雷……」

「え? 多属性魔法の同時発動……!?!」

トパーズさんの驚いた声に対して、マードックさんがやれやれとばかりに言う。

「だから言ったろ! そいつはヤベーって……」

「二つ合わせて、複合統一魔法「フレイムスタンアロー」!」

僕が炎と雷を纏った矢を作り出すと、トパーズさんはわなわなと震える。

「ふ……複合統一魔法……そんなのって……っていかやめて! そんな魔法を放ったら訓練場が壊れるわ!」

「本気でやっていいって言われたからやろうと思ったんだけど……」

僕は「フレイムスタンアロー」を解除した。

すると、トパーズさんが僕に近づいてくる。

「多属性魔法の同時発動や複合統一魔法なんて高等技術、誰に習ったのよ？」

「父方の祖母ですが……」

「貴方のあばあさんって何者なの？」

「魔法のカーディナル・ハーサフェイです」

「やっぱりか……ハーサフェイと聞いてもしかしたらとは思ったんだけど……」

トパーズさんはそこで言葉を切ると、虚空に語りかけた。

「妖精さん、今日も可愛いわね。うふふふ……うふふふふ！」

「現実逃避するなあ……」

トパーズさんは、マードックさんに頬を叩かれると我に返った。

そして僕は、合格をもらった。

「本来なら三つの試験を合格すればクリアなんだが、もうクリアで良いんじゃないか？」

「そうねえ……もう結果は目に見えているし」

そうマードックさんとトパーズさんが話していると、次の部屋へと続く扉の方から声が

する。

「困るなあ、僕の試験を飛ばそうと言うのかい？」

見ると、白衣を着た研究員らしき男の人が立っていた。

「僕の名はターレント！ 僕の試験は一味違う！ ポーションを作製出来るかが合格の基

準だ！ 冒険者たる者、低級のポーションくらい作れないとやっていけないからね。ここ

にある材料でポーションを作るんだ！」

「ポーションじゃないと駄目ですか？」

僕が尋ねると、ターレントさんは怪訝そうな顔をする。

「駄目ではないが、何を作るつもりだい？ まあ、回復効果さえあれば好きな物を作って

くれて構わないよ」

「わかりました！ それではちゃちゃつと作っちゃいますね！ ……『魔導錬成』！」

ポーションは本来薬草と水で作るのだが、普通に作ると薬草を磨り潰したり煮た

りと時間がかかる。そのため、魔法によって物体同士を合成する魔導錬成を使って七種類

の薬草を合成した。

「出来ました、エリキシル薬剤です」

「エリキシル薬剤って、いわゆるエリクサーのことだよな？ いやいやいや、まさかま

さか……」

ターレントさんはそう言うと、死にかけている魚にエリキシル薬剤を一滴垂らした。すると、死にかけの魚は嘘のように元気になり、飛び跳ねながら水槽に戻っていった。ターレントさんは地面に座り込んで天井を見上げる。

「空が青いなあ……」

「落ち着け！ お前の見ているのは天井で、しかも真っ白だ！」

「それに今は夕方よ！ たとえ本当に見えたとしても赤いはずよ！」

ターレントさんは、マードックさんとトパーズさんの二人にどこかの外れなツツコミと共に揺さぶられて、我に返った。そして僕に尋ねてくる。

「魔導錬成を使っていたけど、誰に習ったんだい？」

「僕の父に……」

「こいつの家名は、ハーサフエイだよ」

「祖父がジェスターで、祖母がカーディナルだつて」

「ということは、君のお父さんつて、錬金術の権威であるジーニアス・ハーサフエイ？」

「そうです。よく父の名をご存知でしたね？」

僕の言葉を聞いたターレントさんは、少し沈黙して、しゅたつと手を挙げた。

「僕は研究者辞めます！」

「いや、その前に合格か否かを伝えてやれ！」

マードックさんがツツコミ。

するとターレントさんは目を剥いた。

「そんなもん、合格に決まっているだろ！ ポーションを作れと材料を渡したらエリクサーを作ったんだぞ！ そんな奴を不合格に出来るか！」

こうして僕は、三人から合格をもらったのだった。

「おめでどう！ これで君は冒険者の一員だ！」

「応援しなくても、すぐに上位ランクになりそうね」

「よし、仕事は終わりだ！ 二人とも、飲みに行こう……僕の奢りだ！」

マードックさんとトパーズさんとターレントさんがそれぞれ言う。

そして彼らは、受付の方へ戻っていった。

僕も三人の後についていき、受付のお姉さんに合格通知を渡した。

「はい、三人から合格通知をいただきました！」

「はい、お疲れ様です。では、こちらがリユカ様のギルドカードになります」

「ありがとうございます！」

僕はギルドカードを受け取る。記載された冒険者ランクはもちろん最低のFランクだ。その後、冒険者の注意事項や禁止事項等を聞いて、手続きは終わった。

「とりあえず、Fランクで出来る仕事を見してみるか」

僕はクエストボードに張り出されている依頼の中から、Fランクでも出来る仕事を探す。Fランクで受けられるのは……薬草採取・下水道清掃・害獣駆除・低級の魔物の討伐依頼とかか。

「何がいいんだろう？ 薬草採取か、害獣駆除？ それとも——」

「なあ、君は初心者かい？」

振り返るとそこには、金髪で背の高い冒険者がいた。

その横には格闘士や魔道士、ヒーラーの女性も立っている。

僕は頷いて答える。

「はい、先ほど試験が終わって冒険者になりました！」

「なら、君を俺達のチームに入れたと思うんだけど、どうかな？」

「本当ですか!? 依頼をこなしてランクを上げないとチームには入れないと思っていました!」

「俺達も最近チームを結成したばかりだね。サポーターを探していたんだけど、どうかな？」

サポーターとは、チームのお世話係。戦闘をしない代わりに冒険の準備や戦闘の補助など、やることはたくさんある。

「僕なんか出来るでしょうか？」

僕がそう尋ねると、金髪の男は爽やかな笑みを浮かべて頷いた。

「俺達もチームの初心者だ! これから一緒に高め合っていこう!」

こうして、僕はチーム【烈火の羽ばたき】に加入した。

それから二年後。僕はあることを金髪の男——リーダーのザッシュから告げられることになる。

第一話 チーム追放(やっと解放されました)

「リユカ! 貴様をチームから追放する」

ここは冒険者ギルドの隣にある酒場。

大勢の冒険者やチームの目の前で、僕は突然ザッシュからチーム追放を言い渡された。

「理由を聞いても良いですか?」

僕が聞くと、ザッシュは鼻で笑う。

「お前が役に立たないからだよ、サポーター! 守ってもらってばかりで戦闘には参加しないし、その上どこかで買った物を自分で作ったなどと嘘をつくし、武器のメンテナンス

も問題だ！ 修理用の金を渡したが、修理屋はそんな持ち込みはされていらないと言う！だから最近では、お前には金を渡していない。だというのに、なぜこんなに金を持っているんだ？」

ザツシユは、僕が財布代わりに使っている袋をテーブルの上に出して言った。

その金は、最近チームから報酬がもらえないのでコツコツと貯めていたものだった。

僕はその金の袋を取り返そうとするが、ザツシユはそれをひょいと持ち上げてしまう。さすがに腹が立った僕は、反論する。

「戦闘に参加したい」と言ったら、『お前なんか役に立つか！』と言われ、『魔法が使える』って言っても、『変な見栄を張るな！』と怒鳴られ、『ポーションや強化薬を自作出来る』と言っても、毎回嘘だつて片付けられるし、武器のメンテナンスだつて『自分でやった』つて言っただじゃありませんか！」

「はいはい、うそうそ〜！ そんなに自分は出来ますアピールがしたいのかよ？ そんな奴信用出来るか！ だから貴様を追放することにしたんだよ！ そうそうお前の代わりが……いたいた！」

僕が振り返ると、そこにはアイテム士の冒険者がいた。

「コイツは、アイテム士のドウグだ。貴様の代わり……と言ったら失礼なくらい優秀だ」
アイテム士——ドウグは、ペコリと頭を下げた。

「初めまして、新メンバーのドウグと申します。そしてさようなら、役立たずのサポーターさん！」

僕はその失礼な自己紹介を無視してザツシユに言う。

「追放の理由は、僕が役に立たないから……それだけなんですか？」

「お、鋭いねえ。もう少しでチームがDランクからCランクにランクアップするんだよ。いつまでも役立たずを入れているとチームの評判が落ちちゃうんだよ！ これで満足か？」

僕はせめても抵抗を試みる。

「じゃあせめて、退職金くらい出してくださいよ！」

「出るわけないだろう！ 貴様は散々良い思いをしてきたんだ、そんな奴になぜ金を支払わなければならぬんだ？」

「ダンジョンで宝を入手しても皆は均等に分配されるのに、僕だけいつも少なくて——」

「貴様は役に立っていないからな！」

「薬品を揃えたり、武器の修復だつて無料じゃ出来ないんですよ。それも最近では自費で賄っていたし、散々な思いしかしてませんよ！」

「貴様が変な嘘をつかなければ、ちゃんと渡していたんだよ！ それにタダ飯は喰えただろ？」

「皆が酒場で食事をしている時に、僕は隅でパンと水しかもらえませんでしたけどね」

「寝る場所だったら与えてやったるー!」

「最初は部屋でしたが、『役立たずに部屋を与えるなんてもつたいない!』ってことで、僕は物置に寝泊まりする羽目になりましたけどね」

「そのどこが不満なんだよ?」

「不満じゃないですよ!」

他のチームのサポーターより待遇が悪く、給料も安い。それをギルドに報告しても、「チームのことはリーダーに言ってくれ」と言われて話にならなかった。

正直言つて不満でしかないのに、ザツシユは本当に何が不満なのかわからないといった表情だ。

「退職金ねえ? それどころか今までのことを考えると。迷惑料としてこの金を寄越してもらおうか! それと、お前の剣も寄越せ! と言いたいところだが、それだけは見逃してやるよ! 俺様は優しいねえ!」

ザツシユはそう言いながら、僕の袋を弄ぶ。

それを見た魔道士のウイズと治癒術士のチエが笑い出した。

最後まで惨めな思いをさせてくるなんて酷すぎる。腸が煮えくり返る思いだった。

「おい、無能! もう俺様達の近くをうろつくんじゃねえぞ! 目障りだからな」

「こつちから願い下げだ」

ザツシユの言葉に対して僕は吐き捨てるように言うと、酒場を後にした。

さて、一文無しに……なったわけではない。

あの袋には、銅貨三十枚しか入れていなかったから。

それ以外の蓄えは収納魔法で隠しているのだ。

ダンジョンの宝から少し拝借しているので、いくらか蓄えはある。

先ほどはかなりムカついたが、これでザツシユ達から解放されたと思えば、せいせいするような気持ちでもある。

僕はこれからどうしようかと考えながら、足取り軽く歩き出した。



リュカが去った後の酒場にて、ザツシユは愉快そうに笑っていた。

「おいおい、あの役立たずの財布には銅貨三十枚しか入っていないな。これじゃあ、酒代にすらならねえよ!」

この世界の通貨は、銅貨・銀貨・金貨・白金貨の四種類があり、銅貨百枚⇨銀貨一枚、銀貨千枚⇨金貨一枚、金貨一万枚⇨白金貨一枚となる。

銅貨一枚には一円程度の価値しかないため、リュカは全財産が三十円だと思われている

わけだ。

その言葉に、チエとウイズも大きな声で笑う。

「無能で役立たず、おまけに貧乏人……ウケるわあ！」

「でも、なけなしのお金を奪われて少し可哀想……なんて微塵も思いませんわ！ 清々しました！」

「チエもウイズも酷いねえ……あ、俺様もか！」

ザッシュが言うと、三人はいっそう大きな声で高らかに笑った。

だが、格闘士のガイアンだけはリュカを氣遣って金を渡しに行こうとする……が、彼の腕をザッシュが掴んだ。

「どこ行くだガイアン？ まさかあの役立たずの元に行こうとか言い出すんじゃないだろうな？」

「さすがに気の毒だろう？ 銅貨三十枚しか入っていない財布を奪われて、どう生きていけて言うんだ！」

「ガイアンは優しいねえ？ でも、アイツがどこかでくたばろうがどうでも良い！ 腹が減ったらその辺に生えている草でも喰うだろ？」

その言葉にガイアンは深いため息をつく。

「お前……二年間も一緒にいて情が湧かなかったのか？」

「情だあく？ そんなのありませーん！」

ザッシュがそう言って笑うと、ウイズとチエも大声で笑う。

ガイアンはリュカを心配して、酒場を出て冒険者ギルドに行くが、そこにはリュカの姿はない。

ガイアンは諦めて酒場に戻るのだった。



僕、リュカは酒場を出て、隣にある冒険者ギルドへ行く。

クエストボードで依頼を探すためだ。

僕の現在のランクはFランクで、レベルは10。レベルは、ギルドに登録した時点から加算される、経験値を貯めることで上げられる。魔獣を倒す、あるいは特別な依頼をこなすなど経験値を獲得する手段はいくつかあり、普通ならチームはメンバー同士で協力し合っ
て、経験値稼ぎをする。しかし【烈火の羽ばたき】ではそんなことをしてくれるわけはなかった。

「さてと、何か良い仕事はないかな？」

金は当座をしのげる程度にはあるが、余裕はない。

かー祖父ちゃんからもらった袋の中身は古銭こせちの青銅貨で、現在では使われていないものだった。

それこそ骨董屋こつちやにでも持っていけば売れるかもしれないが……赤銅の方が価値が高いので、大した額にはならないだろう。

考えていても仕方ない、か。一番金になる討伐依頼は……？

僕はゴ布林討伐の依頼書を持ってカウンターに行く。

「あら、リュカ君！ 今日チームのお使い？」

僕が冒険者として登録してきた時に対応してくれた受付のお姉さん——サーシャさんとは、随分と仲良くなった。毎回僕がギルドに来る度にこうして気にかけてくれるのだ。

僕は首を横に振る。

「いえ、実はチームから追い出されてしまったんです。ソロになったので稼がないと思って、この依頼を受けることにしました」

「チームから追い出されたって……それにこれって、ゴ布林退治よ？ リュカ君平気なの？ いくらお金がないからって……」

「ゴ布林は村にもいたので、討伐は慣れてます」

それに、お金がないは余計です。

まあ、僕の村にいたゴ布林は、ゴ布林チャンピオンやゴ布林リザードだったから、

普通のゴ布林くらい平気でしょ。

「討伐証明部位は右耳だけ……本当に大丈夫？」

なおも心配そうなサーシャさんを安心させるために、僕は大きく頷いた。

「大丈夫です！」

サーシャさんに別れを告げてから冒険者ギルドを出た僕は、早速街の近くにあるクウワトスの森へと向かう。

ゴ布林は夜行性なので、本来なら昼間に討伐するのがセオリーのだが、ストレスが溜たまっているので、憂うれさ晴らしがてら今から討伐を行おうと思っっているのだ。

僕は素敵魔法そくまほうを展開する。

「森側に三十弱、洞窟内に八十匹以上か？ それに人間の反応もあるな？」

ゴ布林は人里から若い女を攫さらってくることがある。

それだけでなく、低ランクの冒険者チームが討伐に行き、振り返りにあつて捕とらえられ、女の人は繁殖はふしよの道具として使われ、男は食い殺されてしまうといったことも少なくはない。ちなみにカナイ村では、ゴ布林は他の魔物の餌用えきように捕らえていた。

なので、うちの村から女性が攫さらわれたことなんて一度もなかったんだけど。

「さてと、別に用心する必要すらないとは思っけど、念のために……防衛魔法「プロテ

クシヨン」、反射魔法「シエル」、高速移動魔法「ヘイステイ」、攻撃力上昇「シャープネス」！」

これだけ重ね掛けしておけば問題ないだろう。

僕は洞窟の前にいるゴブリンを片っ端から狩っていき、討伐証明部位の右耳を切り取った。

その後、死体を一つにまとめて、炎魔法で燃やす。

「おやおや、やっぱり気付かれたか？　じゃあ、行くか！」

僕は洞窟の中から出てきたゴブリンをさっと倒しつつ洞窟内へ入る。

「ザツシユが一匹、ザツシユが二匹……ザツシユをまとめて十二匹！　弱いなザツシユ！」

ゴブリンをザツシユに見立てて、次々に屠っていく。

ふう、これでいくらかスッキリした。

では、次は……ウイズかチエの名を叫ぼうかな？

そんなことを考えながら広いエリアに出ると、そこには多くのゴブリンが待ち構えていた。

少し薄暗いので、閃光魔法で洞窟内を照らす。ゴブリンどもは目が眩んでいるな。

「討伐証明部位が必要だから燃やすのはまずいよな？　洞窟内だし、ガスが充滿しても僕

は死なないけど、ゴブリンが木っ端微塵になると討伐証明部位を集めるのが面倒だし……
そうだ、闇魔法「グラビティ」！」

広場の中央に、黒い大きな球体が出現した。この球体は、遠くの物を近くに引き付ける効果があるのだ。

しばらくすると、周囲にいたゴブリンが球体に吸着されたので、風魔法で切りまくった。
「グラビティ」を解除すると、地面には百匹近くのゴブリンの死体が転がる。

「ああ、面倒くさい！　これ全部取らなきゃダメなんだよね……」

僕は片っ端からゴブリンの右耳を切り取って収納魔法に収めた。

その後、敵魔法をもう一度展開すると、奥の細道の方にもう一匹反応があった。
道を進んでいくと、椅子に腰かけて寝ている、一際大きいゴブリンがいた。

「ゴブリンジャイアント？　いや、太りすぎたホブゴブリンかな？」

どの程度の強さなのか確かめてみたいと思つて剣を抜いたが、寝ているのなら起こす必要はない！　面倒なので魔法で倒そう！

僕は風魔法で首を切り落とす。

でも、普通のゴブリンじゃないから、討伐証明部位が違うとかあるのかな……？

「うーん……わからないから頭ごと入れておこう」

その後ろに扉があったので開けてみると、近隣の村から奪われたと思われる金品や宝石

が置かれていた。罨が仕掛けられている宝箱もあったので、罨を解除すると、中には魔石がぎっしり入っていた。

それらを全て回収してからは、人の反応のある方に向かう。

するとそこには、服を剥がされて全裸にされた女性達が五人横たわっていた。

二人は既に息絶えていたが、三人は無事だったようで、俺が来たのに気付いて体を起こす。

だけど、話が出来ないほどにショックを受けていて、口も利かないし、動きもしない。

「キュアポイズン」！ 「キュアバラ……面倒だ、「フルキュアラ」！ 「リザレクシオン」――」

状態異常回復と治療魔法を放つと、女性達は正気を取り戻して立ち上がった。

僕は洗濯するつもりで持っていたチームのシーツに一応クリーン魔法を使ってから、三人の女性に渡す。

「あとは、二人の女性だけ……？」

僕は状態異常回復と治療魔法は使えても、蘇生魔法の類は使えない。

僕は、二人の遺体をシーツに包んでから収納魔法に入れた。

それから僕は洞窟を出て、そのまま街に入って冒険者ギルドに報告しに行った。

「リユカ君、おかえりなさい！ それと、こちらの女性達は？」

「討伐依頼のゴブリンの巢の中にいた女性達です。これ以上は……言わなくてもわかりますよね？」

サーシャさんが職員に合図すると、職員は女性達を救護室に連れていった。

そして、収納魔法から今回討伐したゴブリンの右耳百二十九個と、ホブゴブリンの頭と、宝箱に入っていた魔石以外の金品や宝石と、女性達の遺体を取り出して渡した。

他の職員達は絶出でゴブリンを調べ始めた。

「収納魔法が使えるの!? ……ってそれよりリユカ君、ゴブリンを何匹討伐したのかしら？」

「えっと、巢の外にいたのと、巢の中にいたのを全部」

「え？ 全滅させたの」

「はい、これで当分はゴブリンの討伐依頼はなくなりますね」

「リユカ君、Fランクよね？」

「そうですよ……」

「レベルはいくつになってる？」

「えっと、26ですね……」

「この頭、ホブゴブリンに見えるんだけど？」

立ち読みサンプル はここまで



「多分、そうだと思います」

サーシャさんは大きなため息をつけてから、集計を出してくれた。

「ゴブリン一匹あたり銅貨一枚での買い取りだから、一匹分おまけして銅貨百三十枚。ホブゴブリン討伐で銀貨五枚、ゴブリンの巢の殲滅でポーナズとして銅貨五百枚で、合計銀貨五枚と銅貨六百三十枚の報酬になるわ」

僕はあまりの買い取り額の高さに、驚いてしまう。

「ホブはなんでそんなに高額で買い取ってくれるんですか？」

「ホブは本来ならそれほど高く買い取っていないんだけど、これは変異種だからね」

変異種の討伐依頼料は通常種より高額だと聞いたことがあるけど、そこまでなのか？

まあ、いいや！ とりあえずは稼いだお金で美味しい物を食べるとしよう。

そう考えウキウキする僕に、サーシャさんが言う。

「それと、ランクアップに関する手続きがあるから、明日また来てくれる？」

「ランクアップですか？」

「とりあえずギルマスに報告しないといけない案件だから、よろしくね」

「かしこまりました！」

そうして、僕は冒険者ギルドを出た。